［満足感］

［なぜ満足しないの？］

ブネイ・バルーフカバラ教育研究所

[満足感]

[なぜ満足しないの？]

なぜ、私は満足しないのですか？

なぜ私達は満足しないのでしょう？

そうですね、でも満足しないことは良いことです。

なぜなら私達は、そのような方法ですべての進展の裏にある動機の力を感じるからです。

身体的、 精神的、 両方の隠された自然の「原因として働くレベル」においてです。

私達が「動き」として見なすこと、

すなわち世界の他の場所に移動することから、

内面の微妙な感覚の変化にいたるまでが、なぜ起きるかといいますと、

この力が私達の居心地を悪く感じさせ、

願望を満たすことを現状態で不可能にし、

そして私達はより大きい充足感に対する欲求を抱き始め、

それが新しい状況下に必ずあると計算するからです。

私達は、ちょうどそこまで「動く」だけで、それ以上はありません。

もしもこの計算でなければ、

人は指の一本も動かさないし、鼻をかくことさえもしません。

では、どのようにして最大限の喜びを最小限の努力で獲得するか。

それはエゴの E=mc2 のようなものです。

この公式は何処にでもあります。

物事がそのような形で提示されないかぎり、

私達は絶対に選択しないこともそうです。

私達はいつでも自分たちの考える苦痛か歓楽のどちらかを選択し、

いつでも歓楽を選びます。

すぐに手に入るもの、

または、少々の痛みを払ってでも見込みのある大きい喜びのどちらかです。

しかし、喜びはそれ自体には存在していません。

何かそれと反対のものが自然のなかになくては、それを感じることができません。

私達はなにも「本質」としては体験しません。

ただ比較することによって体験します。

光は闇とくらべ、暖かさは冷たさと比べ、

喜びは苦痛とくらべて感じるのです。

もし比べるものがなければ、単に感覚もないのです。

実は喜びは欲求とそれを満たすものが合致する箇所であり、

欲求が大きいほど、喜びの体験も大きいのです。

ではなぜ喜びはいつも消えてしまうのでしょう？

お腹がすこし減った時、どうなるかわかりますよね。

まず、なにが食べられるか考えます。

「プレッツェルにしようかな… まだいいかっ」

でも空腹感はどんどん大きくなります。

「ホットドック二個にしようかな… いや、ピザ一枚にしよう…」

「いやわかったぞ、ステーキだ！でっかいサーロインのにしよう！」

＜菜食主義のひとは代わりに豆腐ハンバーグを想像してください＞

ベークトポテトと想像できるスパイスと一緒に。

そして料理がやっと来た時、

あなたは、住所がつくぐらいの大きなステーキが食べれる気がします。

その最初の一口は快感その物です。

二口目は、すばらしい。

その次は、おいしい。

その次は、まあまあ。

その次は、好きなように感じたこと。

その次は、「もう一口もいらない、これ以上食べたら、気持ち悪くなるよ」

欲求が小さくなったのです。

それはもうステーキに対してはないのです。

そしてもう喜びは感じる事ができなくなります。

欲求が消えたからです。

これらがすべて起きる理由は、

私達が自分達だけを満足させようとしている利己的な願望が

究極的に人間の経験を制限し、身体的なものにしているからです。

なぜなら私達 自分自身の欲求は小さく、

絶対に充足できないようにできているからです。

にもかかわらず、私達は永続的な喜びを切望し、

それがどういうわけか必ずあると感じています。

そしてそれはあるのです。

しかし、それを感じるためにはまず、

限界のない充足感を引き寄せることのできる

際限がなく、いつまでも膨らむことのできる願望が必要です。

それをするためには、

私達は他人を満たす事に喜びを見つけなくてはなりません。

この「与える」という願望はスピリチュアルな願望で、

そのひとつの味わいは、すべての生命が今までに感じた喜びよりもすべて大きいのです。

なぜならそれは、私達の小さな主観的な欲求のなかではなく、

全てのなかで感じられる喜びだからです。

その願望には際限がなく、その欲求から得る喜びが尽きることはないのです。